

「読書オリンピック ふくしまっ子大会 ～どンドン越えていこう～ 『読書ハードル』スタート」(11月4日) No. 19

『学習・情報センター』としての図書館教育6 学校司書のかかわりで授業が充実！ 福島市学校司書研修会 in Matsukawa-e」(11月10日) No. 20

『読書ハードル』途中経過」(11月16日) No. 21

『読書ハードル』間もなく終了！」(11月22日) No. 22

『読書の街 ふくしま』の灯を灯し続けましょう！」(12月1日) No. 23

これは、「福島地区学校図書館研究会だより 学校図書館 耳より情報」のタイトルである。発行者は、福島市内の小学校の校長先生である。毎号、中身が充実している。真似をしると言われてもできるものではない。

「読書の街 ふくしま」とあるように、福島市は読書に力を入れている。市がそこに力点を置くということは、野田中学校も、生徒が本を読むように取組を進めるということである。市としての具体的な取組の一つが「読書ハードル」である。

「小学生の読書に関する実態調査」によると、読書と学力の関係は、読書量が多いほど「知識」の力は高まる。学力の低い子どもほどその効果が高い。その一方で「思考力」も読書量が多いほど高まるものの、学力が高い子どもと低い子どもにおける違いは「知識」の場合に見られたような明らかな差はない。

そうであるならば、子どもたちに、どンドン本を読ませたいところだが、これがなかなか容易ではない。時間があるからといって本を読もうとはならない。本以外に興味を引くようなものがたくさんある世の中である。本屋さんに行って本を買う場合には、みんな新しい本であろう。ワクワクしながら選ぶに違いない。学校にある図書室の本を読ませようと思うならば、子どもたちにとって魅力的な新しい本を入れなければならない。新しい本にはお金がかかる。

中学校でも「朝の読書」を取り入れている学校は多い。したがって、全く本を読まないという中学生は少ないはずである。「家読」という取組もある。ビブリオバトル、ブックトークなどの活動もある。子どもたちが足を運ぶような図書室としての環境を整える必要がある。

昔、一定の期間、図書室を使って国語の授業をしていたことがある。それは、古典の学習だったり、読書紹介の活動だったりした。私は図書室にいて、生徒たちが図書室にやってくる。図書室の机は大きいので、作業をするには教室の机よりも適している。図書室で授業をすれば、普段は図書室に近づかない生徒でも、図書室に親しむようになる。どんな本があるのかもわかる。

小学生と中学生のうちに本に親しむ経験をさせたい。大人になれば、必要に迫られて本を読まざるを得ないこともあるだろう。自分の人生をより豊かにするために、心の栄養として本を読むこともあるだろう。小・中学生のうちに、その土台はつくっておきたい。

読書に関する資料を見たり、話を聞いたりする機会がある。一番印象に残っているのは、「学校図書館の館長は校長先生です」である。そうだったのか。これで、読書や図書室に向き合うスタンスが決まった。これからも、「耳より情報」を楽しみにしながら、本に親しみ、自分から本を読む中学生を育てていきたい。